

## 変革の時代に

弘 津 禎 彦

大阪大学



2000年あたりからナノテクノロジー・ナノサイエンスの風が吹き始めたことにより、国や企業の考え方に変化が現れ、現在、「ナノ構造」を意識した基礎研究、応用開発が非常に盛んとなっている。本来、材料の極微領域の構造観察や解析、また、極微サイズの材料の観察、解析などの「ナノ構造観察・解析」は、電子顕微鏡の得意とするところであり、

我々の分野では古くから行われて来ている内容で、「何を今頃？」と言いたくもなるが、それはともかく、この風は電顕屋にとっては喜ばしい「時代の風」である。顕微鏡学会は、さぞかし活気に満ち溢れているであろう、と思われがちであるが、現実はそのとは大きくかけ離れ、1991年のバブル崩壊に伴って、年々、メンバーが減少する憂き目に会っている。学会は、会員増強を図ることと時代に対応することを目的として、2002年度より「(社)日本電子顕微鏡学会」から「(社)日本顕微鏡学会」に名称変更を行い、活動範囲はTEM, SEMだけでなくSTM, AFM, 共焦点レーザー顕微鏡、近接場光顕微鏡、X線顕微鏡などを含めた顕微鏡全体へと広がった。しかしながら、今のところ学会名称変更も会員増強への有効な手立てにはまだなっていない。

学会では、毎年、電子顕微鏡大学やサマースクール、分科会や研究部会、支部のセミナーなどが開催されており、顕微鏡法の基礎を学ぼうとする人達やその先端的知識を得たい人達へのサービスとしては、他学会と比較して遜色のないものと思われる。注目すべきことは、参加者はこのところ、景気低迷にもかかわらず増加傾向にあり、非会員の参加者数も年を追って増していることである。会員数が減少してきている一方で、セミナー等への非会員参加数が増加傾向にあるということは何を意味するのであろうか。このあたりに、今後、学会が取り組まねばならないポイントが隠されていると思う。会員となる必要性を感じない理由は、「会員になるメリット」が見出せないためである。学会では一昨年、「会員増強のためのアンケート」を実施し、会員および非会員が学会をどのように捕らえていて、何を期待しているかについての情報が得られている。その結果は学会誌(vol. 42, No. 3)に綴込み掲載されているが、「学会員としてのメリット」が感じられる学会、「ソリューション」が得られる学会を期待する

声が非常に大きい。どのような対応が考えられるかについては、このアンケート回答にあるいくつかの方策が参考になるはずで、そのうち、学会ホームページの充実などはすでに昨年度、実行に移されている。米国発の金融危機がもたらした未曾有の世界同時不況の大波が押し寄せ、多くの企業で巨額の経営赤字が生じている昨今である。会員数の増加については、このような社会的状況の下ではしばらくは困難であろうが、しかし、会員離れは回避したいものである。それには、学会の魅力づけをより一層進める必要がある。

我が国の大学や研究機関はいま、政府の政策も手伝って、海外からの研究者、大学院生の受け入れという方法によるグローバル化の波にもまれようとしている。多くの研究室で「公用語が英語」となりつつあり、若手研究者は英語での研究内容の説明、発表などに慣れてきていると同時に、外国人との間の考え方の違いや慣習の違いなども多く学び取りつつある。最近の本会の春の学術講演会では、アジアの若手研究者を招いての講演も行われるようになり、国際性が加わってきた感がある。学会活動に国際性を持たせることも新しい時代の方向であり、学会の新たな魅力作りに繋がり、我々の学会もその方向に向かいつつある。ところで、秋のシンポジウムに関しては、主催者側の懸命な努力にもかかわらず、どのようなテーマを掲げてみても、講演内容は春の学術講演会で講演された内容に近いものである。「これは何とかならないのか」と思うのは私だけであろうか。いっそのこと、秋のシンポジウムは、アジア圏の若手の顕微鏡研究者、技術者を中心とした参加者が数十人規模の「若手国際シンポジウム」を中心に据えてみてはいかがであろうか。また、学会からは10名くらいの渡航費を工面していただくことも考えられる。幸い、渡航費は今はアジア圏だとあまり高くない。そのうち彼らの方から自腹を切っても毎年、意見交換や情報集めに参加するようになれば大成功と言えるであろう。現在世界を襲っている同時不況の後に来る世界経済の修復の方向は、今までの米国一極集中経済から「経済圏の多極化」に向かうとされており、アジア経済圏はその一つである。アジア諸国間で研究、技術交流の輪を広げることが必要とされてくるであろう。我々の先輩方は、アジア諸国の電子顕微鏡分野の研究を盛んにするために、多くの努力を払い、研究者交流や教育に時間を費やしてきた。次の時代を担う大学・研究機関、企業の若手研究者や技術者の国際交流に学会が援助し、交流の仕組みを育てていくことが必要な時期に今さしかかっているのではと思う昨今である。

弘津禎彦 (Yoshihiko Hirotsu)

1969年東京工業大学大学院理工学研究科修士課程修了後、同工学部助手、長岡技術科学大学工学部助教授(1980～1991)、同教授(1991～1994)、大阪大学産業科学研究所教授(1994～2008)、2008年同停年退職、同大学名誉教授  
2009年より大阪大学海外拠点本部特任教授、大阪大学グローニンゲン教育研究センター長